オオゲジサマ―呪と贄編―

えつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オオゲジサマ―呪と贄編―

【Ｎコード】
Ｎ３８６３Ｓ

【作者名】
えつ

【あらすじ】
オオゲジサマの続編。熱をだした御巫を前にオオゲジサマがおろおろしていたら、竹かごを頭に被った虚無僧のような少女が声をかけてきた。故郷を失った化物と少女が、ドタバタしながら生き残った仲間を探す旅。

その1

嫌だ。死にたくない。嫌だ。嫌だったら。
女は全身全霊で叫び、哀願していた。
上半身は普通の人間だが、下半身は蛇で、波立つようにうねっている。
その腕をつかむのは、黒と茶色の僧服に身を包んだ男。
男は鋭利な長い長い爪を一閃すると、女を真っ二つにして食べてしまった。

◆

少女が泣いている。
悲鳴を上げるように絶叫し、とめどなく涙を流している。
かたわらには毒々しい異形の怪物が寄りそい、たまに飛んでくる火の粉をコウモリ羽で防いでいた。
あたりは炎に包まれていた。
戦でも起きたのか、建物は壊され、地面には死体がいくつも転がっている。
それはこの里だけではないらしく、国中が赤々と照らされている。
異形がぽつりとつぶやく。
「ミカはしっかりしてるから大丈夫だろうけど、他の皆が心配だな……特にゴンベはもう歳だし」
「い、い、いったい、なにが」
しゃくりあげる幼子の頭をつた状の脚でなでながら、異形が耳をすます。
「さあ、内乱みたいだけど。いずれにせよ、この国はもう終わりだ」
少女は肩をびくりとふるわせた。
異形が一つしかない目玉でそれをじいっと見つめて、なだめるよ

うに言う。
「だからナギ。生き残った御巫（みかなぎ）一族を探しに行こうよ。それで、どこかにまた御巫の里を作ろう」
そうすればまた以前のように暮らせるよと囁かれて、少女はしばらく呆けていた。
ただ涙だけが流れ続ける。
「ナギ」
やがて、少女は顔をぬぐってうなずいた。

◆

暗い森の奥を、老人がとぼとぼと歩いていた。
薬の材料にする薬草やキノコを採っている内に、道に迷ってしまったのだ。
おかげでカバンがぱんぱんに膨らむほどの収穫はあったが、今日は野宿するしかなさそうだ。
まあ朝になって日が昇れば帰り道もわかるだろうから、それまでの辛抱。
そうため息をついたとき、
「じいさん、薬売りか」
いきなり声をかけられて、老人は心臓発作をおこしそうになった。
あわてて周囲を見回すが、人影らしいものはどこにもない。
「だれかいるのか」
「泣きすぎたみたいで子供が熱をだしたんだ。薬をわけてくれないか」
男の声。
ひどく近くで聞こえるが、どこからかよくわからない。
「それなら丁度いいものがあるから売ってやろう。……しかし、おまえさんどこにいるんだ？」
薬箱をおろして老人が問う。

「ここだ」
足元の地面からいきなり、ごつい両手がとびだした。
「きいやあああああああああああああああああああああああ！？」
老人は目玉をひんむき、うら若い乙女のような悲鳴をあげて野生の獣並の速度で逃げ出した。
とり残された両手は、
「……おかしいな。ちゃんと人間に化けたのに」
軽く身震いすると、土の中から全身ぬけだした。
がっしりとした大男だ。
何人か殺していそうな凶悪面で、鋼のような肉体にはいくつも傷跡が残っている。
男は老人が置いていった薬箱にふんふんと犬のように鼻を近づけ、困ったように言った。
「どれが熱さまし？」
「見せてみろ」
幼い少女の声がして、男が顔をあげる。
少し離れた木の影に、十歳くらいの子供がひっそりと立っていた。
虚無僧のように竹で編んだカゴをすっぽりかぶっていて、顔が見えない。
けれどもその下は普通の町民の格好で、小さな手足が着物からでていた。
「わかるの？」
少女はこくりとうなずく。
「近くに私たちの村がある。病人を連れてくれば看病しよう」

◆

なんか生臭い。でもって息苦しい。
御巫（みかなぎ）は冷や汗を浮かべ、うなされていた。

歳は先日１０歳になったばかり。
黒髪おかっぱの愛らしい顔立ちの少女で、ほっそりとした手足が布団と寝間着の合間からのぞいている。
「う……？」
彼女がふと目を開けると、胸の上にぬめっとした生物が寝ていた。
ナメクジを大型犬くらいに巨大化して、黒く染めて青紫色に光る触手をいっぱいつけたような生き物だ。
「のわあああああああああああああああああっ！？」
飛びおきた衝撃で黒ナメクジがぼてぼてっと地面に転がる。
「あ、ナギ。具合はどう？」
その声にようやく、生物の正体に気づく。
「お、オオゲジサマでしたか」
オオゲジサマというのは、御巫が仕えている主人の名前だ。
主食は罪人や行き場のない死体で、一度食べたものになら何でも化ける事ができる。食べた物を合成して化ける事もできるようで、よく気持ち悪い姿に好んでなっている。
つい最近まで国の守り神として封印されながらも大切にされていたが、色々あって国を留守にしていた間に国が滅亡し、二人は行き場を失ってしまった。
「具合って？　……ここはどこですか？」
どうやらどこかの小屋らしく、すぐそばに囲炉裏と戸が見える。
「あの後すぐナギが熱出して倒れちゃったから、とりあえず近くの国へ移動したんだ」
「そうだったんですか」
熱のせいか、泣いた後の記憶がない。
ふいに小屋の扉が開いた。
同い歳くらいの子供だろう。
なぜか竹かごを頭に被った小柄な人物が入ってきた。
こちらを見るなり、一言。
「村では人の姿をしていろと言っただろう」

着物は女物なので女の子だと思うのだが、少年のように凛とした声だ。
「……仕方ないな」
黒ナメクジはにゅうと伸びをすると、妖艶な美女に化けた。
ゆるく波立つ栗毛色の髪。健康的な肌色で、豊かな胸元がかすかに揺れる。
一糸まとわぬ姿のまま床に寝そべろうとするオオゲジサマに、竹かごの少女が大人用の着物を出してきて放った。
うちの一族らしいあの人にはもう化けないんだろうか。
美女をながめながら御巫がそんな事を考えていると、少女が振り返った。
「熱は下がったようだな」
「はい。ここはあなたの家ですか？　泊めて頂いてありがとうございます」
「別に。何もない所だが、回復するまでいればいい」
竹かごで覆われて顔は見えないが、何となくじーっと見られている気がして照れくさくて、御巫は話を変えた。
「そういえば、あなたはオオゲジサマを怖がらないんですね」
うなずいたように竹かごがゆれる。
「化物なのは、私たちも一緒だから」

その2

むかし、むかし。
よそ者をひどく嫌う村がありました。
彼らはずっと村だけで暮らし、外とは交流をもちません。
たまによそ者が迷いこんでくると、石を投げて追い返したりしていました。
そんなある日、村の浜辺に若い男が流れつきました。
船が沈没でもしたのか、全身ぐっしょりと濡れて青ざめ、今にも死にそうです。彼は厳重に封をしたつぼを抱えていました。
村びとたちは男から荷物だけを奪って見殺しにしました。
しようとした、と言うほうが正確でしょうか。
瀕死の男は死ななかったからです。
怒り狂った男は村びとすべてを醜い化け物に変え、ふらふらと村を出ていきました。
彼は呪い師だったのです。

◆

「この村に伝わる昔話だ」
竹かごをかぶった少女が言う。
「じゃあ、あなたが」
「柚羅（ゆら）」
「私は御巫（みかなぎ）といいます。柚羅が竹かごを被っているのは、その呪いのせいだったんですね」
「ああ。見ると目が腐るぞ」
特に気にした様子もなくそう告げて、柚羅は食事の支度を始めた。
「呪いを解く方法って、ないんでしょうか……？」
御巫が独りごちると、彼女のひざ枕で寝ていたオオゲジサマが何

か言いかけたが、先に柚羅が口を開く。
「気にするな。これでも須佐さまのおかげで、呪いは徐々に薄くなっているんだ」
「須佐、さま？」
おきあがろうとした御巫を制して、手際よく山菜と魚を鍋に投入する。
「先祖が呪いにかけられたあと、村に旅の僧侶が来たそうだ。先祖は僧侶に貢ぎものを送り、呪いを解いてくれるよう頼んだ。それからずっと僧侶は村に滞在し、私たちのために呪いを解く儀式を続けている。それが須佐さまだ」
「へえ……って、ご先祖様が呪いをかけられたんですよね？　須佐さまが来たのって、けっこう最近なんですか？」
「呪いを受けたのが３００年と少し前で、須佐さまが来たのは２００年前だ」
「長生きしすぎですよ！？」
びびる御巫に、柚羅は平然と言う。
「修行をつんだ仙人は数百年生きると聞いたことがある。徳の高い僧侶ならおかしくはないだろう」
「そんなものですか……？」
確かに仙人の伝説は聞いたことがある。
オオゲジサマだって人間じゃないけど３００年くらい生きてるし、とひざを見ると、主君は眉をひそめ、つまらなそうにつぶやいた。
「……馬鹿なことをしてるなぁ」
柚羅の包丁を持つ手が止まる。
「馬鹿？」
御巫があわてた。
「オオゲジサマ！　失礼ですよ恩人に向かって！」
オオゲジサマは平気な顔でしっぽをゆらしている。普通の人型に飽きて生やしたようだ。
「だって馬鹿じゃないか。手枷を外すために手首を切るような真似

してさ」
どういう意味だろう。
聞きたかったが、柚羅が怒りを押し殺したように言った。
「わかったような口を利くな」
「僕は君より――」
言いかけたオオゲジサマの顔によくわからない生物が投げつけられた。
あとで聞いたが、ナマコとウミウシという海産物らしい。
「食ってろ！」
御巫の前に雑炊の入った鍋と茶碗をおき、柚羅は外へ飛び出していった。
「柚羅！」
よろめきながら御巫が後を追い、当然のようについていこうとしたオオゲジサマは、
「ちょっと留守番しててください！」
「えっ」
怒られて固まった。

◆

外は日が沈んだばかりで、目の前には暗い森が広がっている。
木の合間から海も見えた。
少し離れた所にいくつかの家。
この小屋は村の外れに建っているようだった。ちょうど木が茂っていて、村からは見えない位置にある。
彼女はどこだろう。
人気のない所かなと目星をつけて、森の奥へ進む。
柚羅（ゆら）は大きな岩の上に腰かけ、うつむいていた。
「オオゲジサマが失礼なこと言ってごめんなさい。悪気はないんですけど、ちょっと無邪気というか無神経というか、素直すぎるだけ

なんです」
御巫(みかなぎ)がそっと声をかけると、竹かごが少し上を向いた。
「……御巫は？」
「え？」
「おまえも私たちは馬鹿だと思うか」
長生きしているだけあって、オオゲジサマは御巫より賢い。
まだ人間をよくわかっていないような節はあるものの、あの生き物が「馬鹿」というからにはそれなりの理由があるのだろうと思う。でも柚羅が愚かなようにも見えない。僧侶に呪いを解いてもらって、何がいけないんだろう。
「……わかりません。まだよく知らないし」
「そうか」
柚羅は立ち上がると、不意に森の奥を振り返って告げた。
「隠れろ！」
御巫が一瞬固まり、あわてて茂みにつっこむ。
やがて、小さな地鳴りのような足音が二つ近づいてきた。
「かっかっかっ。今日はでけえ猪しとめたぞ」
「柚羅あー。おまえ今だれかと話してなかったかぁー？」
普通のおじさんの声。
けれど、その異様な風体に御巫はびくりと肩をすくめた。
一人は両腕が地面につくほど長く、頭に水牛のような角が生えている。まぶたがないのか、目は真円に近いむき出しで、肌は腐った死体のようにただれていた。
二人目はでっぷりと太った小男だが、目も鼻も耳もない。大きな口だけがついていて、手足が指くらいの長さしかなかった。
「ひとりごとだ」
「そおかあー。猪バラしとくからよお、後でとりにこいよー。好きなだけもってけ」
「他にも欲しいもんあったら言えよ。晩飯食えるのも最後なんだからな」

「ああ、後で行く」
男たちが村のほうに去ったあと、静かに柚羅が問う。
「驚いたか？」
「う、は、いえ、オオゲジサマで慣れてますから。それより、最後って……？」
「明日の夜、私は儀式の生贄として死ぬんだ」
彼女の表情は竹かごで覆われていて、わからなかった。

その3

年に一度。
呪いをかけられたのと同じ晩に、須佐さまが儀式を行う。
村人の中から一人生贄を選んで海へささげ、解呪を願うのだ。
その間、村人たちは家の外に出てはいけないと固く戒められている。
儀式は見られると効力を失い、かえって呪いが強くなってしまうからだそうだ。
そして、日が昇ると同時に村人の呪いは軽くなる。
「あと2，3年もすれば完全に呪いが解けるかもしれない」
淡々と柚羅は言う。
「でも、柚羅は明日死んでしまうんでしょう？」
御巫が眉をひそめる。
「私が死んでも、村のだれかが一人でも人間に戻れるなら……親も友達も、皆そう言って生贄として死んでいった。中には嫌がる者もいたが、抵抗すれば……」
仕方ないんだ、と柚羅は言う。
けれど彼女の手は震えていた。
もしかすると、オオゲジサマが馬鹿と言ったのはこの事だったのかもしれない。
御巫はそっと手を重ね、声をひそめた。
「私たちと一緒に来ませんか。逃げましょう」
「……」
思いもよらなかったのか、しばらく柚羅は押し黙ったまま返事をしなかった。
やがて、
「無理だ」
「どうして」

「皆村のために死んでいったのに、私だけ逃げられない」
「そんな、生きたいと思って何が悪いんですか」
「それに、こんな化物が外の世界で生きていけるものか」
そんなことない。
反論しようとして、脳裏にオオゲジサマがよぎる。
あの生物も醜い化物だからと山に封印されていた。
隣国で正体を現したとたん、皆が恐れ逃げまどった。
黙って眉尻を下げていると、
「ナギをいじめるんじゃないよ」
子供のような声とともに周囲の木々が大きくざわめいた。
頭上をあおぐと、無数の目玉がらんらんと金に輝いている。
闇にまぎれて気づかなかったが、木の上に大きな大きなクモがいた。
木そのものよりも巨大なそれは顔だけでなく体のあちこちに目玉がある。
また気持ち悪いのに化けたなあ……ずっと人型でいれば良いのに。
あきらめにも似た気持ちで御巫が息を吐く。
「話は聞いた。僕が何とかしてあげよう。柚羅には借りがあるしね」
留守番しててくださいと言ったのに、目玉グモことオオゲジサマは悪びれもせずそう言った。
「何とか、って」
「呪いを解けるのか？」
「たぶんね」
胴体に比べて異様に手足の長いクモは、くすくす笑いながら地面に降りると、柚羅の腕にガブリと噛みついた。

◆

次の日の夜。
闇に包まれた村の中、柚羅の小屋だけにかがり火が灯されている。

そこへ、黒と茶の僧服に身を包んだ男が歩いて来た。
見た目は３０代半ばほどで、いかにも人の良さそうな顔つき。
とても２００年以上生きているようには見えないが、おそらくこれが「須佐さま」だろう。
須佐が戸をたたくと、小屋から竹かごをかぶった柚羅がしずしずと出てきた。
「ついてこい」
こくり、とうなずくように竹かごが揺れる。
二人はゆっくりと村を出て、やがて海岸沿いの自然洞窟へ入った。
貝やフジツボが壁にこびりつき、天井はびっしりとコウモリで埋めつくされている。
その最奥部。
祭壇も偶像も何もない、味気ないくらいにさっぱりした場所につくと、須佐が言った。
「眼を閉じてじっとしていなさい。痛いのは一瞬だ」
柚羅がうなずく。
須佐は彼女の頭から竹かごを外し、右手を一閃した。
少女の首は大きな血しぶきを上げてふっ飛び、床を何度かはねて落ちる。
痙攣して動かなくなった体を長いカギ爪が乱暴に引き寄せる。
僧侶は毛むくじゃらのサルに変貌していた。
ただ、サルにしては牙と爪が異様に長く、洞窟をうめつくさんばかりに大きい。
獣は少女の胴体にかぶりついて血を吸い、飢えたように肉をむさぼる。
不意に、
「なんだよ、食べるだけぇ？」
柚羅の生首がケタケタと笑った。
「呪いを解く儀式とやらはどうしたんだよ。食べてから？　ってことは死体は必要ないんじゃないか」

サルが目をむく。
入り口のほうから少女の悲鳴が響いた。
「オオゲジサマ！？」
青い着物の少女――御巫が駆けてくる。
直後、生首から昆虫の足が生え、爆発するようにふくらんだ。
「うえ！？」
御巫があわてて足を止める。
二本の触覚にのっぺりとした黒い甲羅。ゴキブリと少し似ているが、内側は脚だらけでダンゴムシの腹を連想させる。
生首ことオオゲジサマは巨大なフナムシと化していた。

◆

須佐に連れて行かれたのは柚羅の血を吸い、彼女に化けたオオゲジサマだった。
食べたものに化けることができるとは聞いていたが、血を吸うだけでも大丈夫らしい。
詳しい説明はされなかったのでとりあえず後をつけていたら、オオゲジサマがサルに食われていてあわてて飛び出したのだが――どうやら大丈夫そうだ。
「須佐さまは……？」
御巫に続いて後を追ってきた柚羅が問う。
こちらはまだ竹かごをすっぽり頭に被り、左腕に包帯を巻いていた。
「私も今きたところなので、さっぱり……」
御巫が困ったように視線を泳がせる。
その先には、フナムシに絡めとられ、半分以上身体を食われた大ザルがいた。
「弱い。不味い。つまらない。不味い」
ガジガジかじりながらぼやくフナムシ。

サルが抵抗するようにおたけびを上げる。
耳をふさぎながら、御巫が言った。
「オオゲジサマ、そのサルなんですか！？」
フナムシの触覚がこちらを向く
「須佐さまだよ。サルが人に化けて人を食ってたんだ」
「え！？」
御巫と柚羅が息をつまらせる。
血まみれのサルが口を開いた。
「何が悪い！　年に人を一人食う代わりに村人の呪いを解いてやってるんだ！　お互い合意の上でやっていること。おまえにとやかく言われる筋合いはない！」
「ふざけるな！　サルに食われるなんて聞いてない！」
柚羅が声を荒げる。
「呪いを解く儀式に必要だと聞いたから、今まで私たちは――」
サルが笑った。
「ああ必要だとも。だれが無償であんな面倒な呪い解くもんか！　年にたった一人、食わせてくれりゃそれでいい。儀式で死のうが食われて死のうが一緒だろう？　それが嫌なら化物のまま全滅す――ぎゃあああああああ！？」
「うるさいよおまえ」
フナムシががっぷりとサルの脳みそをかじった。
「僕はその辺、どーでもいーんだけどさー。人間と共生しながら合意の上で人を食べるっていう点では僕も一緒なわけだし？」
「な、なら」
「でも言う事きかないなら食べる」
サルの頭部が半分なくなる。
残っているのは上半身と頭半分だけになってしまった。
「言う事ききますううううううううう！」
獣の悲鳴が洞窟に響いた。

◆

「俺に何をさせたいんだ」
半分しかない、臓物たれながしの身体でサルが言う。
「今すぐ村人たちの呪いを解け」
オオゲジサマがまともな事を言っている。
御巫はひそかにこの生物を見直した。
が。
「こんな死にかけの状態で呪いなんか解けるわけねーだろ！」
サルの言葉にフナムシがぱかっと大口を開ける。
「おおお脅したって無駄だ！　身体が完全に再生するのに百年はかかる。身体が元に戻らねーととても解呪なんかできねーよ！」
「え？　そんなにかかるの？　僕一瞬で再生するけど」
心底意外そうなフナムシに、壁際に逃げていた御巫がおそるおそる声をかけた。
「動かない身体の分、私たちが手伝うというのはどうですか？」
「おまえ、呪いの印なんか結べんのか？　百個は暗記しないと使い物にならねーぞ。大体、俺の精神力がもたねえ。元気な時でさえしんどいから年に一度しかしてねーってのに、こんな状態でやったら死んじまう！」
洞窟内がしんと静まり返った。
「……どうするんですか？」
「何とかしてくれるんじゃなかったのか」
「どうしようね？」
てへっとかわいこぶるフナムシ。
二人の少女はそろって絶望したように地に手をついた。
「逃げましょうよ」
「できるかそんなこと」
柚羅はふらふらと入り口の方へ歩いて行く。
「元々、今夜死ぬはずだったんだ。皆に本当のことを話して死ぬ気

でわびる。運が良ければ半殺しですむかも」
「無茶で……あっ」
追いかけようとして、御巫が柚羅のそでをつかんだまま転んだ。
つられて二人ともすっ転び、柚羅の竹かごが外れる。
「ご、ごめんなさ」
顔を上げた御巫が見たのは――ちょっとキツそうな顔立ちの美少女だった。
切れ長の瞳に、すっと通った鼻筋。凛とした目つきに短い黒髪のせいか、美少年にも見える。
柚羅がとっさに袖で顔を隠す。
御巫がつぶやいた。
「可愛いじゃないですか」
「お世辞はいらん」
「そーじゃなくて、呪われてるように見えないんですが」
「え？」
洞窟の外。
夜明けの海に自分の顔を映して、柚羅がぽかんとつぶやいた。
「どうなってるんだ……！？」

その４

こっそり村の様子を見てきたところ、柚羅以外の村人の呪いは解けていないようだった。
「最悪だ……皆の呪いが解けるのが１００年後になってしまったあげく、私の呪いだけ解けるなんて。本当に殺されるかもしれない」
皆の言うとおりよそ者なんか信用するんじゃなかった、と柚羅がうなだれる。
どう声をかけていいかわからず、御巫が手持ちぶさたでいると、奥からオオゲジサマがはい出てきた。
「あいつ、ケガが治るまで洞窟にひきこもってるって」
「そうですか。……どうしましょうね」
「村人全員が僕かナギを好きになれば一発なんだけどねえ」
「そうですねえ……って何の話ですか？」
問われて、太陽は東から昇るんだよとでも言うかのようにフナムシは言う。
「村人がよそ者を好きになれば呪いは解けるんだよ。よそ者嫌いな村人がよそ者に親切になるようにかけられた呪いだから」
二人の少女が目を見開く。
「何でそんな事知ってるんですか」
「呪いがかけられたとき僕もいたから。解き方は僕にしか言ってなかったけどね」
事もなげに告げるフナムシ。
「え、でも、３００年前って言ったらオオゲジサマはまだツボの中――あああ！？」
この村に伝わる昔話を思い出して、御巫が頭を抱える。
それじゃあ、もしかして。
「この村に呪いをかけたのは私の御先祖様……？」
「そうだよ」

「どーして早く言ってくれないんです！」
「聞かなかったじゃないか」
御巫は脱力した。
「あああ。私の御先祖様がごめんなさい……柚羅？」
柚羅はなぜか顔を真っ赤な顔にして、目が合うとさっと竹かごを被ってしまった。
「ち、ちが……！　歳が近いやつと会ったの久しぶりだったから、ちょっと嬉しかっただけなんだ！」
何の話だろう。
「はあ。ところで、村の人は今もよそ者が嫌いなんですか？」
「へ？　ああ。呪いを解いてくれる須佐さまだけは別だったが、よそ者に関わるとろくな事がないと言って皆避けている。暴力を振るう事はなくなったが、見つけ次第村から放り出すし、よそ者と口をきいたのがバレたらしばらく村八分だ」
御巫が息をのむ。
「そんな状況なのに助けてくれたんですね」
「私はよそ者を見たことがなかったから興味があったし、そうじゃなくてもおまえ達は色々な意味で珍しかったから」
だろうなあ。
ちらりとオオゲジサマを見る。目が合うと、嬉しそうにカサカサ寄ってきた。まずいまずいと文句を言っていたわりに、須佐を食べてから少し機嫌がいい。多少は腹の足しになったのだろう。
「オオゲジサマ、私に考えがあるんですけど……」

◆

朝日が昇り、村人たちが起きだした。
浮き足立っているような、罪悪感にとらわれているような、何とも言えない面持ちでそれぞれ家族や友人の姿を確認し、眉をひそめる。

呪いがちっとも薄くなっていない。
昨日の儀式に何か不備でもあったろうか、と噂していると、集会の合図の鐘が鳴った。
「集まれ！　須佐さまからお話があるそうだ！」
そんな声を聞いて村人たちの顔色が変わる。
儀式が失敗したのか。
疑惑の色もあらわに村人たちが集会所に集まると、そこにはいつも通り竹かごを被った柚羅と須佐が立っていた。
どうして生贄が生きているのかと、刺すような視線が少女にそそがれる。
人間離れした異形たちに取り囲まれる中、須佐は厳かに口を開いた。
「私はもう儀式を行えない」
村人たちの顔が一斉に険しくなった。
「どういう事だ！」
「何のために貢いでると思ってる！」
「あと少しじゃないか！」
怒号が飛び、須佐と柚羅のそばの茂みがおびえるように揺れた。
それを視界の端にとらえて、須佐がごくかすかに笑う。
「寿命がきたのだ。私は明日にでも死ぬだろう。……そこで、今回は生贄を使わず、私自身の命を引き換えにしてあなた達の呪いを解こうと思う」
ざわめきが広がる。
「そんな事が……できるのか？」
「そりゃあ、ありがたいが」
「いいのか、あんた」
「本気か」
僧侶は人の良さそうな笑みを浮かべる。
「なに、２００年も世話になったのだから、最後に皆さんに恩返しをしようかと」

「須佐さま……」
４０人弱ほどいる村人の内、３人の姿がもやがかかったように霞む。
下半身がなく上半身だけで、皮膚は汚泥のように黒く、目と鼻の部分だけわずかな凹凸があるもの。
胴体がなく、頭から直に手足が生えているもの。
身長は普通なのに、小指くらいの厚みしかないもの。
まばたき一つの間に、彼らの姿がごく平均的な人間のものへ変化した。
「おい、おまえ、呪いが……っ！」
一同が再びどよめく。
須佐は軽く目を見開き、儚げに笑む。
「それでは皆さん、さようなら。最後に皆さんのお役に立てて幸せです」
言うなり、身体が砂塵と化した。
黒と茶の僧服が地面へ落ち、砂が風に飛ばされて消えていく。
「須佐さま！」
何人かが砂に駆け寄るが、すでにつぶ一つ残ってはいなかった。
取り残された異形たちが顔を多い、わっと泣きだす。
その姿が霞んでいくのを尻目に、草むらから見慣れない子供がそっと村を抜けだすが、だれも気に留めていなかった。

◆

「あー疲れたー」
村から少し離れた森の中。
できそこないの砂人形のような、いびつな砂のかたまりが口をきいた。どことなく、恨みがましい表情の人の顔のようにも見える。
「お疲れ様です。上手くいきましたねオオゲジサマ」
村のほうから御巫が追ってきた。

――すべては村人の呪いを解くための一芝居。
ちなみに、本物の須佐はそんな騒ぎなどつゆほども知らず、今も洞窟の中で寝こんでいる。
そのまま少しまっていると、柚羅が小走りに駆けてきた。
「どうでした？」
「全員、呪いが解けた……よそ者がここまでしてくれるとは思わなかったと感涙して、須佐さまの祠を建ててお祭りするって言ってる」
「良かったですね！」
御巫がほほえむ。
「でも、何でまだかごを被ってるんですか？」
指摘されて、柚羅が竹かごに手をやる。
「何となく、落ちつかなくて」
そんなものだろうか。
「せっかく綺麗な顔なのに」
何気なく御巫が言うと、砂人形が足元に寄ってきた。
「僕は？」
あなたは大体気持ち悪いです。
呪いの砂人形からそっと目をそらしていたら、柚羅がぽつりとつぶやいた。
「このかご、私が3歳の時に親が被せたんだ”気持ち悪い面見せるな”って」
「え」
そんな親がいるのか。
思うと同時に、直前に考えていた内容が内容なだけに、何となく罪悪感がわく。
「生まれた時から呪いつきだったから。……だからまだ竹かごなしで歩くのは怖い」
「……」
気の利いた言葉が浮かばなくて、御巫はたまに大人が自分にそうしてくれるように彼女の頭、というか竹かごをなでた。

「柚羅は綺麗ですよ」
「僕は？」
「たまに」
何が嬉しいのか、オオゲジサマは犬のようにくるくる回ってはしゃぐ。
「それじゃ、そろそろ行きますね。行方知れずの家族やら親戚やらを探しに行かないといけないので」
「ああ……色々と、ありがとう。またいつでも遊びに来てくれ。村の皆のよそもの嫌いも段々なくなっていくと思うし、私がそうさせるから」
ええまたきます、と手を振って、御巫とオオゲジサマが去っていく。
その姿が視界から消えるまで見送ったあと。
柚羅がそっと頭に被っていた竹かごを外す。
「……」
しばらく何かをためらうかのようにそれを見つめ、やがて、そのまま村の方へ消えた。

その5

昔々、パキラ国で王子が生まれました。
パキラはそこそこ大きくて豊かな国だったので、色々な国の使者がお祝いに来ました。
王とお妃は顔をほくほくさせていましたが、ガマル帝国の使者の言葉に空気が凍りつきました。
「王子は双子の手にかかって死ぬでしょう」
正確には、ガマル帝国の使者につきそいできた呪い師見習いの少年の発言です。
「死を逃れるには我が帝国と同盟を結び、トス鉱山を差し出す以外にありません」
みえみえの脅迫でした。
トス鉱山とは、パキラの名産ダイヤモンドを算出する、国にとってなくてはならない大事な山のことで、この鉱山がなければパキラは何のとりえもなくなってしまいます。
同盟などと言ってはいますが、パキラを帝国の植民地にするつもりだと王は判断しました。
ガマル帝国は大陸で一番大きな国で、最近ますます勢力を拡大しつつあります。きっとそれで調子に乗っているのだと。
少年の隣にいる正式な使者も、少年を咎めるどころか好戦的な笑みを向けてきます。パキラの兵に囲まれたこの状況で、剣一つしか持たずに喧嘩を売るとはいい度胸です。
当たり前ですが、王はブチキレました。
「いい加減なことを言うな！　おまえたちはトス鉱山が欲しいだけだろうが！」
少年はしれっと答えます。
「それがそうでもないのですよ。確かに難癖つけて鉱山を頂いてこいと指示は受けましたが、何の因果か、本当にそうなのです。あな

たのご先祖が鉱山で双子の奴隷を惨たらしくなぶり殺したりしたんじゃないですか？　ひどく恨まれている」
呪いをかける手間は省けましたがね、と。
実は鉱山でダイヤモンドが採れることがわかる前、そこは奴隷の闘技場として使われていたのです。中でも双子の奴隷同士を殺しあわせ、どちらが勝つかを賭けて楽しむのが当時の王のお気に入りでした。
今となっては王族だけが知る秘密ですが、それを知っていた王は青ざめました。
「なっ、なにをでたらめを……！」
その時、側近の一人があっと少年を指さしました。
「思い出したっ！　黒い髪に黒い瞳、黄色い肌。おまえ、帝国の狐では」
別の側近がたずねます。
「狐？」
「有色人種嫌いの帝王が唯一召抱えたという、東洋人。この世のものと思えぬほど美しく、まだ若いくせに呪いの腕では北の死神にもひけを取らないとか」
広間につどっていた王侯貴族、兵士たちがざわめきました。
北の死神の名を聞いて悲鳴を上げる者もいます。
「顔が黄色いから狐などという、不愉快なあだ名です。東洋人はこれが普通なんですがね……まあ私のことはいいでしょう。王、ご返答を」
ガマル帝国の正式な使者が「俺のことも忘れないで欲しいんだが。俺だって戦場ではそこそこ名の知れた……」とかブツブツ言っていましたが、話が進まないので狐は聞こえないフリをしました。
「衛兵！　殺せっ！　そいつらを殺してしまえ！」
王が叫び、王宮中の兵士や呪い師が一斉に彼らに襲いかかります。
狐は卵に似た玉を床にたたきつけると、中から飛び出したツバメモドキという巨大な怪鳥に飛び乗って、使者と共に逃げ出しました。

「お返事、確かに承りましたよ」
すぐに追手を出しましたが、彼らを捕らえることはできませんでした。
王は烈火のごとく怒り、すぐに国中から双子を追放、あるいは処刑しました。
直後、パキラ国とガマル帝国に戦争が始まります。
戦は約5年間続きました。
本来の戦力差でいえばガマル帝国にすぐぷちっと潰されてもおかしくなかったのですが、あそこまでコケにされたら死んでもトス鉱山を手放すものかとパキラ国が粘りに粘ったのと、ガマル帝国が別の資源豊かな国にも触手をのばし、そちらに熱心だったこと。そして戦の終盤に狐が帝国を去ったことなど、色々な要因があって二国は停戦し、パキラ国は大きな湖と島をいくつか取られたものの、トス鉱山を取られずにすみました。
王子も老いるまで死ぬことはなく、予言は破られました。
けれど、今でもパキラ国では双子は不吉とされているのです。

◆

御巫(みかなぎ)はとても疲れていた。
オオゲジサマがイノシシや狼を狩ってきてくれたりもしたが、火打石なしでは火がおこせず、刃物もないので解体もできない。なので、ここ数日野草と果物しか口にしていない。果汁以外の水やお茶が飲みたくて仕方なかったし、清潔でやわらかい布団で眠ることに慣れている彼女にとって、野宿生活は肉体的にも精神的にもキツかった。
こんな事なら柚羅に水や食料、火打石などを分けてもらうんだった。
御巫は激しく後悔し、次の機会があれば必ずそれらと生活用品を手に入れようと決意した。

そこで、新たな問題が発生する。
「オオゲジサマ、お願いが……」
「どうしたの？」
弱々しく声を上げる少女に、オオゲジサマが首をかしげる。
ちなみに今この生物は馬と狼と、なぜかコオロギをごちゃ混ぜにしたような奇怪な姿をしている。それでも頭部が馬か狼なら良かったものを、コオロギの顔に狼の牙が生えているものだからいっそう不気味だ。
「今日中には国につくんですよね？　もうこの辺りにも人がいるかもしれないし、今からその国を出るまで、目立たないように人間に化けて大人しくしていて欲しいんです」
コオロギもどきが軽く目を見開く。
「これ、目立つ？」
「目立たないと思うんですか？」
このまま国に入れば、魔物と呼ばれること間違いない。
「馬だっていうことにすれば」
「こんな馬は存在しません」
「ちぇー」
「それにですね。一族の皆を探したり、旅に必要なものをそろえるためには何日か国の中に滞在する必要があると思うんです。でも、でもですね」
御巫は小さな手足をばたばたさせた。
「私一人では武器も売ってもらえないし、宿屋にも泊まれないんです。オオゲジサマが大好きなお酒だって買えません！」
哀しいかな、逆立ちしようが背のびしようが、まだ十歳なのだ。
大人がいないと店に信用してもらえない。
「それは大変だ」
オオゲジサマがするりと人間の少年に化けた。
１５，６歳くらいで、物静かとでもいうのか、知性を漂わせる顔つきで、御巫と同じく黒い髪に黒い目をしている。

「わあ、ありがとうございます。……ところで、服は作れないんですか？」
彼はすっぽんぽんだった。
つい最近まで親兄弟と風呂に入っていたので別に恥ずかしくも何ともないが、このまま国には入れない。
「やっぱり着なきゃ駄目？　人間の服って窮屈なんだけど」
「駄目です」
即答すると、オオゲジサマの身体が陽炎のようにゆらぎ、服を着た状態になった。
身体を変化させるのと同じ要領で服も作れるようだ。
そうして自分の牙を一本、ぺきっと引っこ抜いて御巫に差し出してくる。
「何ですか？」
「僕からのお願いかな。国に入って他の子供と混ざっちゃうと、ナギの見分けがつかないんだ。だからこれ持ってて。けして離さないように」
「わかりました」
「いい子だねー」
わしわしと頭をなでられる。
御巫は久しぶりに人の手でなでられて和んでいたが、ハッと身をこわばらせた。
「お金を一銭も持ってないのを、忘れてました……」
オオゲジサマがきょとんとした。

◆

「そういえば、人間はお金がないと生活できないんだね」
オオゲジサマがしげしげと御巫をながめる。
「どれくらいあれば足りるの？」
「さあ……ゲジ国以外の通貨はわからないので、なんとも」

なぜか、少年はニタリと笑った。
「わかった。じゃあ、こうしようか」
オオゲジサマはお金を集めてくる。
その間、御巫は国の中で一族の情報を集める。
そして夜に城門の前でまち合わせしよう、という計画だった。
「国の中から野盗や獣も出ないし、安全でしょ」
「そ、そうですね……？」
ウキウキそわそわしているオオゲジサマに一抹の不安を覚えつつ、御巫はうなずいた。
ちょうど正午くらいに国へつき、二人は一時解散した。
「パキラ国城下町へようこそ」
門番らしい兵士が声をかけてくれる。
城門をくぐって、御巫はぽかんと口を開けた。
小さな山里で育った彼女は、ここまで大きな町を見るのは初めてだった。
左側には坑道への入り口があり、中央には噴水広場。右側には様々な店が並んでいる。
看板に描かれた地図によると、今見えている場所は全体の十分の一くらいで、すべての場所を見てまわろうと思ったら城下町だけで三日くらいかかりそうだった。
ど、どこから調べれば……。
途方に暮れていたら、優しそうなお姉さんが声をかけてきた。
が。
言葉がわからない。
「しまった、私ゲジ語以外話せない……！」
さっきの門番は外国人の客に慣れており、御巫を見てゲジ人とわかったからわざわざゲジ語で話しかけてくれたのだろう。しかし、兵士でも何でもない国民がゲジ語を話せる確率ってどれくらいだろうか。
ああ、これでは一族の情報を調べることなんてできやしない。

とんだ計画倒れである。
よよよと落ちこんでいたら、お姉さんがかがんで顔をのぞきこんでくる。
心配してくれているようだ。
「気にしないでください。こうなったら適当に夜まで時間をつぶして」
ふと、言葉を止める。
お姉さんの目に見覚えがあったからだ。
黒髪に青い瞳。
性別や年齢は違うが、いつか会ったレンヤとヨウと同じ色だ。
辺りを見回すと、同じような特徴の人々がたくさんいる。濃い灰色の髪をしていたり茶髪っぽかったり、青というより水色の瞳だったりと、個人差はあるようだが、これがパキラ人の特徴なのだろう。
あの二人はパキラ人だったのかもしれない。
「綺麗」
ぼんやりしていたら、いつまでも門の近くにいたから見かねたのか、さっきの門番のお兄さんが寄ってきた。
「お嬢ちゃん迷子か？　お母さんは？」
御巫は少し考えて、答える。
「この国の中にいると思うんです。私と同じゲジ人、知りませんか？」
親とはぐれたのはウソではないし、そういう事にしておいたほうが一族の情報を調べやすいだろう。
「少し前に大量に入国してきたけど、町のどこにいるかはちょっとわからないな。今はもう出国してるかもしれないし」
俺はこの門しか見てないから、と。
どうやらここは東門という所で、門はあと三つもあるらしい。
だが、入国してきたと聞けただけで嬉しかった。
ゲジ人は全滅したわけではないようだ。
「ありがとうございます。探してみます」

頭を下げると、様子をうかがっていたお姉さんに手を握られた。
「え？」
「一緒に探してくれるってさ。良かったな」
青い瞳が優しげにほほえんだ。

その6

お姉さんに手を引かれるまま町を歩いて、御巫は自分と同じ黒髪に黒い瞳の人間に何度か会った。
やせこけて、道端にうずくまる少年。目が合うなり逃げられてしまった。
店で果物やジャムなどを売る少女。ゲジ人ではなくザイ人だった。
そしてかっぷくのいいおばさん。
自分が御巫であり、オオゲジサマと一緒に一族の生き残りを探していると伝えると、彼女は何とも言えない顔をした。
「あたしはもうゲジに戻る気はありません」
あれだけ荒れ果ててしまった所だ。それも仕方ないだろう。
「そうですか……他に、私の一族がどこへ行ったか知りませんか？」
問うと、ますます言いにくそうに視線をそらす。
「この国にも少し差別がありますから、みんな大陸に渡ったんじゃないでしょうか。帝国も似たようなものだけれど、東南側へ行けば逆に優遇されるから。ゲジはしばらく荒れるって噂もあちこちで流れてるし、この辺りにはほとんど残っていないでしょうね」
礼を言おうとすると、彼女はふっと口調を変えてつけ足した。
「お嬢ちゃんも御巫なんか辞めて、普通の子供としてどこかで暮らしたほうがいいかもしれない。つい最近、御巫一族の何人かに会ったけど……一部じゃあんたがお役目をサボったからオオゲジサマがいなくなって、そのせいで国が滅んだって、恨んでる人もいる」
馬鹿な。サボりなんかじゃなく、誘拐されていたのに。
反論しようとしたが、彼女は聞く耳を持たない冷たい瞳でこちらを見下ろしている。
「真実がどうだろうと、今のあんたは巫女じゃなくただの子供だ」と、言われている気がした。
「オオゲジサマは神獣じゃなく、ただの化物だってのは本当かい？」

「そ、そんなことは」
「最近ザイ国も滅びかけたんだけどね、その時に化物が人を食らって大暴れするのを見たってやつが何人もいるんだ。門番がオオゲジサマがいなくなったって言った日に、ゲジの上空を飛ぶ化物も。……そりゃ人を食う化物の世話なんか任されたら、逃げたくもなるよね」
「違います！　私は、逃げたわけじゃ」
「わかってるよ、冗談だ。だって今も一緒にいるんだろ？　あたしはあんたを責めてるわけじゃない。もう国も、一族のみんなのことも忘れて、化物と別れる。そうしたほうがお嬢ちゃんは幸せになれるんじゃないかなと思っただけさ」
「……そういうわけには、いきません」
そう答えたものの、それはひどく心を揺さぶる言葉だった。
国がなくなって、怒る人も褒めてくれる人もいないのに、どうして自分はあの生き物といるんだろう？
逆に、あの生き物はどうして自分と一緒にいてくれるんだろう？
以前なら、御巫はオオゲジサマの唯一の話し相手といっていい存在だった。でも今はどこへでも行ける。少ないかもしれないけれど、柚羅のようにあの不気味さを気にしない人間もいるだろう。人でなくても、須佐みたいな魔物でもいいかもしれない。
……わからない。
急に心細くなって、お姉さんにぎゅっとしがみついた。

◆

あれから他のゲジ人には会えなかった。
そろそろ夕方になるし、お礼を言ってから城門へ戻ろうと思っていたら、お姉さんの家らしい所に連れていかれた。
「あのう、そろそろ城門に向かわないといけないんですが」
お姉さんはいたわるように微笑み、たらいにお湯をはって服をぬ

がしてきた。
お風呂に入りなさいということだろう。
親が見つからなかったとみて、家に泊めてくれるつもりなんだろうか。ただ、そのままの格好だと汚いから、と。
自分で考えて少し落ちこむ。
毎日着て野宿していればボロになってしまうのは仕方ないが、元々はそこそこ上等な着物なのだが。ザイの王宮で着せられたものではあるけれど、ゲジで御巫が着ていたものと同じ絹でできているし。その、家に上がれないほど酷くはないんじゃないかと。
考えている間に手際よく身体を洗ってもらい、簡素でひらひらした異国の服に着替えさせられた。
御巫からするとちょっと手と足の露出が多い気がするのだが、暑い気候のこの国ではこんなものなのかもしれない。
仕上げに髪に赤い花を数本飾られ、また外へ連れていかれた。
オオゲジサマとまち合わせしているのでちょうどいいけれど、何のためにお風呂に入れてくれたんだろう。さっぱりしたし、汚れた服も引き取ってもらえたので助かったが。
やがて、大きなお屋敷についた。
警備がつくほどではないけれど、並の家3軒分くらいには広く、華美というより派手すぎる装飾がほどこされている。
手入れが行き届いた庭園を通り、裏口へ回る。
獅子の彫刻がついた丸い取っ手で、お姉さんが何度か扉をたたく。
少しして、中から問うような声がしてお姉さんが答える。
中から小間使いっぽいおじさんが出てきて、なめるような視線で御巫をながめた。
気持ち悪い。
よくわからないけれど身震いがして、お姉さんの後ろに隠れる。
なだめるようにやんわり頭をなでられ、中へ入るようながされた。
しぶしぶ従うと、おじさんが重そうな小袋を彼女にわたし、チャ

リンと音がした。
お金？
お姉さんは嬉しそうに微笑んで手をふった。
同時におじさんに腕をつかまれ、奥へ連れて行かれる。
「い、痛いです！　どこに行くんですか」
今のはいったいどういう意味だろう。
不安と混乱で頭がガンガンする。
「離して、離してください！　帰ります！」
がむしゃらに暴れると、パアンと音がした。
身体が床に投げ出されて、血が出たみたいにほおが熱くなって、殴られたと気づく。
親にも殴られたことないのに。おしりをぶたれたことはあるけど。
呆然としてしまっている間にまた腕を引かれ、無理やり歩かされる。
部屋に入ると、おじさんが中にいるだれかに何かを伝え、御巫の背中をどんと押して出ていった。
ふらふら歩くと、イスに腰かけていた老人と目が合う。
しわしわの、枯れ木のようなおじいさんだ。けれどその目は値踏みするみたいに怪しく光り、こちらを見下すような優越感と、よくわからないけど身の毛がよだつ、不気味な感情をあらわにしていた。
「あの、何の用ですか？　私もう帰りたいんです」
老人は下品な笑みを浮かべてこちらに歩いてきて、ごそごそと下半身を露出させた。
老人といえばおじいちゃんといった、優しい印象しか持っていなかった。他人の裸にも特に何の感慨も抱いたことがない。
御巫は初めて、それらを心底嫌悪した。
のびてきた腕をよけ、扉へ走る。
老人の叱責を背に部屋を出て、長い長い廊下を走り、階段を駆け降りた。
後ろから追ってくる気配がする。

途中で驚いたような使用人と何度か出くわし、入ってきた裏口の方へ逃げると、さっきのおじさんに見つかった。
あわてて引き返し、表の玄関をめざす。
今までの人生で一番足がよく動いた気がする。
扉に手をかける。開かない。開かない。カギがカギがカギが。
上手く動かない両手でカギを外すと、同時に髪の毛を乱暴につかまれた。
痛いというより頭皮が熱かった。
ずるずると床を引きずられ、涙が出る。
オオゲジサマ。
痛いよ助けて、と叫んで、服に入れていたものを思い出した。
オオゲジサマの牙。
もう着物も剣も持っていないけれど、これは手放さずにいた。
それをを思いっきり男の腕に突き刺す。
まさか反撃があるとは思わなかったのか、ぎゃあっと男が悲鳴を上げ、激怒したように拳を振り上げる。
御巫が身をすくめたが、拳が届くより先に男がうめき、苦しみだした。
刺した腕が紫に変色している。
この牙、毒でもあるのだろうか。
こわごわと手の中のそれを確かめ、とりあえずつかんだまま御巫は外へ走った。
空はすっかり暗く染まり、月が浮かんでいた。

◆

「……ナギ？」
ぺろりと舌なめずりをして、少年がつぶやいた。
黒髪に黒目、どこか眠たそうな顔つきで、僧や呪い師、あるいは宮廷の貴族が着るような、運動には不向きな服を身につけている。

彼の全身は血で赤く染まっていた。
左手にはさっきまで齧っていた白い骨。まだ肉片がついているそれを投げ捨てようとして、何かを思い出したように丸のみにする。
「おかしいなあ……城門はここだよね？」
しゃがみこんで、道端に倒れている門番に問う。
この血まみれの少年が入国しようとしたのを見とがめ、半殺しにされていたのだ。
門番は震え、声も出ない。
じれたのか、少年はその手をつかむと人とも思えぬ動きで噛みちぎってしまった。
手首とそこから少し上が千切れ、途中で折られた骨と肉が露出する。
門番が悲鳴を上げてのたうち回った。
「返事は？」
残るもう片方の手をつかんで少年がたずねる。
「こっ、ここは北門……門は、あと三つ……ある」
「他にも門があるのか。てことは、迷子かな？　順番に探してみるか」
門番に興味をなくしたようにあっさり開放し、すたすたと国の中へ消えていった。

◆

老人のわめく声とともに、屋敷から何人かが追ってくる。
御巫は死に物狂いで駆けた。
走る、走る。
遠目に見えていた影がだんだん迫ってきてあせり、何度か角を曲がって路地に入りこんだ。これで撒けたらと思ったが、まだ近くで荒々しい足音がする。
足を速めようとしたら、頭から地面につっこんでしまった。

何かを倒してしまったらしく、甲高い物音が響く。
見つかる。
さあっと血の気が引くと同時に、だれかに声をかけられた。
そばの路地に人がいた。
頭に布を巻いていて、顔がよく見えない。服はこの国でよく見かける動きやすいもので、腰に剣を二つ下げている。体つきからして青年だろう。
地をはうようにして後ずさると、しゃがみこんで優しげな声をかけてきた。
うるさい。もう騙されるものか。そうやってまたあの屋敷に連れて行くつもりだ。
「近寄らないでください！」
連れ戻されたらどうなってしまうんだろうと考えると、ぼろぼろ涙が止まらない。
牙をぶんぶん振り回して威嚇すると、
「ちびちゃん？」
驚いたように青年がつぶやいた。
流暢なゲジ語。
どこかで、聞き覚えのある声だ。
「俺、俺だよ！　つかどーしたんだよ、泣いちゃって」
「う……来ないでください」
それでもだれだったか思い出せなくて、戸惑っていると、数人の足音がばたばたとこちらへやってきた。
使用人風の男たちが何かを叫び、御巫をつかもうとする。
反射的に目をつむり、牙を振り上げるが、うめき声と変な鈍い音がして動きを止めた。
使用人の一人がうつぶせに倒れ、さっきの青年が御巫の前に立って鞘に収めたままの剣を一つ構えていた。
青年がパキラ語で何かを告げ、刃を抜く。
使用人の内で剣を持っている者が二人、同時に斬りかかる。

青年は一人の喉笛をかっ切り、もう一人の両目を切り裂いた。
生理的に不快感をあおる気持ち悪い音が連続して響き、異臭がこみ上げるとともに御巫はうっと口元を押さえた。
悲鳴を上げ、怪我人を抱えて使用人たちが去っていく。
「ほら、今の内に逃げよーぜ」
振り返った青年の頭からは、布がとれてしまっていた。
パキラ人の中でもひときわ綺麗な深い青い瞳。
「ヨウ」
御巫はぽかんと口を開けた。
頭の布がとれているのに気づいて、「あっやべっ」とヨウが舌打ちする。
御巫はわんわん泣きながら彼にしがみついた。

その7

御巫の足では長さも速さもたりなかったらしく、ヨウの肩にかつぎ上げられてその場を去る。

そのうち、泣きつかれたのと顔見知りに会えてホッとしたのの相乗効果で眠ってしまった。

ちゅんちゅんと鳥のさえずりが聞こえて、やわらかくはないが野宿よりはずっと清潔で疲れのとれる寝台の上で目が覚めた。

「む？」

ここはどこだろう。

身体をおこすと顔からぬれた布が二枚ほど落ちた。

ぼーっと辺りを見回すと、隣の寝台に腰を降ろしていたヨウと目が合う。

身支度の途中なのか、包帯でほとんど覆われている上半身に上着のそでを通している。が、右腕の部分は存在しないようにぺたんこだ。

彼が無表情で口を開いた。

「カナ」

「御巫（みかなぎ）です」

二文字たりない。

ヨウではなくレンヤの方だったようだ。双子なだけあって、相変わらず外見だけはよく似ている。

「無事だったんですね」

ほほえむと、彼もかすかに目を細めた。

同時に扉が開かれ、三人分の食事を持ったヨウが入ってきた。

「よ。おきたかちびちゃん」

◆

パンという、せんべいのようなもちのような不思議な触感の食べ物と水、あごが疲れるくらい固い干し肉を口にしながら簡単に彼らの話を聞いた。
彼らはザイを逃げ出したあと、深手を負ったレンヤの休養をしながら転々としていたが、ある目的のために故郷であるパキラ国に戻ってきたのだという。ちなみに、レンヤになついていたあの巨鳥は目立つので近くの森でまたせているらしい。
「私は」
自分のあれからを話そうとして、御巫はうわあっと立ち上がった。
「朝！？　もう朝！？　オオゲジサマと約束してたのに」
どうしようどうしよう夜に城門でまち合わせしてたんですーっと取り乱して外に飛び出そうとしたら、レンヤに指一本でちょいと引き止められた。襟首が引っかかって前に進めない。
「おちろ。それで外でるよくない」
おちつけ、という事だろう。
「でも、きっと今ごろ探してます」
「東西南北、どの城門でまち合わせしてたんだ？」
パンをかじりつつヨウが問う。
「城門、ということしか決めていなかったので、わからないんです」
「ちびちゃーん。城門から城門までは、大人の足でも半日はかかる。君の足で全部の城門を探しに行くのは無謀だぞ。あとで俺も一緒に探してやるけど、動かずに迎えが来るまでじっとしてた方がいいんじゃないか？　オオゲジサマっての、その……君より足は早いだろ？」
「……はい」
御巫はためらいがちにうなずいた。
「アレが国に？」
レンヤが眉間に深いシワを刻んでぼそりとつぶやいたが、答えるのははばかられた。自分の腕を食われた彼は、やっぱりオオゲジサマが嫌いなんだろうか。

「それより、何でそんな格好してるんだ？」
思い出すとまた泣きそうになったが、くっと唇をかみしめ、すべて話した。
故郷が滅んでしまい、家族や一族のみんなを探して旅をしていること。オオゲジサマとの約束。優しいお姉さんがした理解できない行動。
話し終わると、双子はそっくり同じ表情を浮かべていた。
苦虫を噛み潰したような険しい顔。
青い瞳は冷たいのに、らんらんと殺気に光り輝いている。
まるで自分が怒られている気がして、御巫の肩がびくりとはねた。
それに気づいたのか、ヨウが相貌をやわらげる。
「何でそういう事されたのか、知りたいか？」
知ったらまた嫌な思いすると思うけど、といたわるように言われたがうなずいた。
嫌な予感はするが、わけがわからないのはもっと気持ち悪いし、理由を知らなければまた同じ目にあうかもしれない。
「ゲジじゃわからないけど、この辺の国じゃ絹って金と同じくらいの価値があるんだよ」
金？
ゲジでも絹はそこそこ貴重品だったと聞いているが、自分の財布というものを持ったことがない御巫は金の価値を知らない。ただ高いものだと教わった。
意図が伝わっていないのを察して、ヨウが続ける。
「その絹でできた、高い服を着てたから目をつけられたんだ」
一緒に親を探してくれたのは、子供にこんな服を着せるほど裕福なら謝礼がもらえるとふんだからだろう。
結局みつからなかったが、絹の服を奪えたから大もうけ。娘は変態幼女性愛者の成金に売ってしまえば、一粒で二度おいしい。
女の考えはそんな所だったんだろう、と。
「変態幼女性愛者？」

「赤ん坊によくじょ」
レンヤがヨウを蹴っ飛ばした。
「近づく、よくないひと」
ヨウがみぞおちをさすりながら、補足する。
「この国じゃ赤い花を身につけるのは身売りの印なんだ」
御巫の髪に飾られていた赤い花を丁寧にとって、鳥の巣のようになっていた頭をクシですいてくれる。
「身売り……」
生涯のほとんどをオオゲジサマのそばで過ごす予定だった御巫は、ほとんど性教育を受けていない。
その単語を聞いてまず浮かんだのはなぜかサバの切り身だったが、たぶん違う。おそらくお金を代価に気持ち悪いことをされるってことなんだろうなと考えた。
「服もかえたほうがいい」
いくらか布の面積が多い服をわたされ、衝立の影で着がえ終えたとき、扉が激しくたたかれた。
「レンヤ！　ヨウ！」
二十歳そこそこくらいだろうか。剣士風の男が入ってきてパキラ語で何かを告げ、紙のようなものをレンヤに渡す。
ヨウが「あちゃー」と髪をかきあげ、レンヤは横目で弟をにらんだ。
物々しいなと御巫が紙をのぞきこむと、そこにはいくつかのパキラ文字と青年の似顔絵が描かれていた。双子のどちらかのようだが……。
「よく描けてますけど、何がまずいんですか？」
「指名手配」
レンヤの言葉にあっと冷や汗をかく。
「ごめんなさい。私を助けたせいですね」
「うーん……ただの成金なら平気だったんだけど、変態野郎は貴族だったみたいだな。いいとこ中級だろうけど、これはマズイ。俺た

ちの顔を覚えてる連中がいるかもしんないし」
ヨウのぼやきに御巫の顔が青ざめる。
「私にできることなら何でもします。で、でも、あの屋敷にだけは……っ」
もどりたくないんです、というより先に双子からぽんぽん頭をなでられた。一歩引いて様子をうかがっていた男が、ハトがマメ鉄砲をくらったような顔をする。
ヨウがへらへらと笑った。
「そんな事しないって。でもしばらく外には出せないし、俺たちと行動してもらうよ。まあ一月もかからないだろ。ただ」
ふと、その笑みが消える。
「万が一の場合は一緒に死んでもらう」
ちびちゃんはいい子だけど、ツメ一枚でもはがされたらしゃべっちゃうだろ？
穏やかなのに見下すような、不思議な声音でそうささやかれた。
傭兵というのは荒くれ者だという。
雇い主に忠誠心を持たず、金次第で汚いことにも手を染め、人を殺めるのに躊躇しない。
知識だけはあったものの、目の前の青年たちもその傭兵なのだと初めて認識した。
きっと、彼らは悪人じゃないけど善人でもないのだ。
私もいい子じゃない、と御巫は思った。
あの使用人たちが死んでも、ちっとも同情する気になれなかったから。

◆

「しばらく外にも出れないし、こうなったら一蓮托生だから話してやるよ」
レンヤと男と何かを話し、二人が部屋を出てからヨウは御巫をひ

ざにのせて語った。
「俺とレンヤはこの城下町で生まれて、六歳くらいまで浮浪児だったんだ」
仲間たちとともに残飯をあさり、金や物を盗んで生きていた。
そんなある日、灰色の髪の貴族に出会った。
洒落者で、いかにも高そうな身なりだったのでヨウが財布をすり盗ろうとし、捕まった。
レンヤが助けに入ったがこれも捕まり、双子なことがバレてしまった。
なぜかこの国では双子は忌み嫌われており、見つかりしだい殺されることさえあったので、生きた心地がしなかった。
自警団につき出すまでもなく殺される。
そう覚悟したが、なぜか貴族は狂ったように笑い、二人を咎めもせずに連れ帰った。
そこで、この国が双子を恐れるわけを聞いた。
ほんの数カ月前、灰色の貴族が美女と評判だった自分の妻を現王子ルイに奪われ、陵辱された妻が自害して以来激しく憎んでいることも。
つまりは双子を養子として育て、いずれ言い伝えどおり王子を討たせたいのだと。
「でも、予言はすでに破られたって」
「はは、俺たちも同じこと言ったなー。予言を受けた王子は死ななかったんだし、そんなもの時効だろうって」
ところが、貴族の間では予言の時に生まれていた王子は王子じゃなかったという噂があるらしい。
当時の王と正妃カダの間に生まれた、王子レイ。
レイは剣も馬も弓も苦手で、いつも城に引き篭って手芸や茶会にいそしみ、夜な夜な女装して町を出歩いていた。
しかも、レイは他国の姫を娶ったが夫婦仲は冷え切っていた。
側室の子に王位をわたしたくなかった王とカダが、男のフリをさ

せていたのではないか。
　そして生まれた子供も妃が生んだものではなく、レイがどこかの男と作った子供なのでは。
　一人目の子供は母親に似ず、レイそっくり。
　二人目の子供はどちらにも似ていなかったうえ、すぐに亡くなってしまった。
「ただの噂なんだけどな。そのあとに生まれた子供もみんな女で、貴族を婿にとって王位を継がせてたから、レイが女だった場合、予言を受けてから生まれた王子は今のルイ一人だけって事になる。それで、灰色の髪の貴族……ライゼンは俺たちに期待したんだ」
　王を討つまでは双子と気づかれるわけにはいかないので、二人は交代で一人のふりをし、剣技を磨きながら順調に育っていった。
　だが、１３歳の時に事件はおこった。
　ライゼンの養子が双子だと、王にバレてしまったのだ。
「やっぱり、性格や仕草の違いで……？」
　おそるおそる問うと、ヨウはなぜか視線をおよがせた。
「いやー、それが。当時モクレンっていう恋人がいたんだけどさー……あんまり彼女がかわいかったもんで、自分の名前を呼んで欲しくなったんだよ。あ、レンヤに俺のフリすんのは無理だからいつも俺がレンヤのフリしてたんだけど。つい、俺たちの秘密しゃべっちゃって。そしたらモクレンがびびって父親にチクって、その父親が王に密告したんだ」
「……あなたという人は」
　女運が悪いというか、女で身を滅ぼす性質というか。
「ああっ、そんな目でみるなよー！　初恋だったんだよー！　それに、当時兄貴にもちょっと仲がいい女の子が別にいたんだけど、兄貴はその子に本名で呼ばれてるのに俺はレンヤって呼ばれるのがすげー嫌で」
　うがああとヨウが頭をかきむしる。
「はあ。それで、どうなったんですか？」

先をうながすと、すねたのかくるりと後ろから抱きこむようにされ、つむじにあごを乗せられた。
「復讐のために俺たちを育てたのに、ライゼンが俺たちを国外に逃してくれたんだ」
それから5年間、剣しかとりえのなかった二人は傭兵となり、あちこちを転々としながら暮らした。
ところがザイを逃れてすぐ、あれからライゼンが財産を没収され、反逆罪で投獄されていることを知る。
「俺たちは親父を助けるために戻ってきたんだ」
しかし二人だけで城の牢に忍びこむのはかなり厳しい。
傭兵仲間や呪い師を何人か雇おうか。だがそれには金がかかる。
しばらく戦で稼ぐしかないかと思っていたら、レジスタンスに声をかけられた。
「れじ？」
「レジスタンス。革命軍、反乱軍っていったらわかるか？」
国王に反感を持ち、謀反をおこそうとしている集団だという。
ちなみに盟主はこの国の公爵クダラで、軍資金も私兵もたんまり持っている。
さらに貴族らしからぬ武骨者のライゼンを気に入っていたらしく、革命が成功したら彼を釈放すると快く約束してくれた。もちろん二人が革命に参加することが条件だが。
革命軍からすると、予言にのっとった双子の協力は縁起がいいと喜ばれた。
不思議と、戦場には信心深い者が多いからだ。
「ちなみにここは革命軍のアジト。あ、隠れ家って意味な」
「いつ、決行するんですか？」
「さあ。当日ちびちゃんは留守番だけど、俺たちが負けたらここもガサ入れされて殺される。勝てば晴れて自由の身だ」
だから勝つように祈っててくれよとあごでつむじをぐりぐりされる。下痢になったらどうしてくれるのか。

「ええ。勝ってくださいね」
言いながら、オオゲジサマに会いたいなあとぼんやり思った。

その8

一方、そのころのオオゲジサマはというと。
アリのようにわいてくる自警団を返り討ちにするのが鬱陶しくなり、井戸で血のりを落として服を変え、町の子のほっぺをつっついていた。
「なっ、何すんだよう！」
お使いの途中らしい、十歳くらいの少年が肩を怒らせる。
この国のほとんどの人がそうであるように、黒髪に青い目をしている。褐色の肌に薄い布の服をまとった軽装で、まだ細い手足は健康的に引き締まっていた。
「違うなあ。確か、目も黒かった気がするし」
眠たげな表情のまま、オオゲジサマが視線を落とす。
「どの城門にもいないし、どこ行ったんだろう」
それを見て、少年は拍子ぬけしたように眉尻を下げた。
「迷子でも探してんの？」
「うん。御巫のナギっていうんだけど、知ってる？」
「知らない。どんなやつ？　見かけたら教えてやるよ」
少し考えて、オオゲジサマは自分の腰上くらいに手をかざす。
「背はこれくらい」
「ちびだな」
そう小さい、とうなずく。
目の前の少年よりほんのり低いくらいだ。
「髪と目が黒い。くるくる動く。よく泣く。よく叫ぶ。すごく弱い。美味しそうな匂いのかわいい子」
「美味しそう？　パンの匂いでもするのか？」
「女子供は甘くて男はしょっぱいから、そういう匂いがするね。君も甘じょっぱい匂いがする」
「はあ？　焼き鳥じゃあるま……」

急に少年がぶるっと身震いする。
味見しようとしたのに気づいたようだ。食べるつもりはないのだが。
「まあ、一番美味しいのは虫だけど」
ネコのようになっていた瞳を戻してつぶやいたが、すでに少年は逃げ去っていた。

◆

クダラ公爵の私兵たちは彼の屋敷付近にいるらしく、ここには雇われた傭兵の一部だけが集められているようだ。
最初に目覚めた二階が宿屋。一階は酒場になっていて、いかめしい戦士たちが４０人くらいくつろいでいる。けっこうな人数だが、建物が広いせいか窮屈な感じはしない。あと２０人くらいは入れそうだ。
中にはゲジ語を話せる人や女性もいて、御巫（みかなぎ）はその人たちにオモチャにされつつ、パキラ語や世界共通語のスクイート語を教えてもらっていた。
「スクイート語ならだいたいどこでも通じるからな。パキラ語よりこっちを優先しな」
短い金髪に赤い瞳の、何とも美しい配色の女戦士が言う。
赤茶色の皮の鎧を身につけていて、その上からでもわかる身体の曲線がなまめかしい。額に目を模した刺青があり、常に悪そうな笑みを浮かべている。
彼女はシュカというそうだ。
「それよりおまえ、あいつらとどういう関係なんだ？」
近くに座っていたごつい男の人がたずねた。
彼はリャン。
縦にも横にも大きく、いくつも古傷が残る身体は鋼のように鍛え抜かれている。眼光も鋭く、片手で御巫の頭を握りつぶせそうな感

じがして、ちょっと怖い。
「レンヤとヨウの事ですか？」
リャンが声をひそめる。
「あいつら、子供がいたからって拾ってくるようなお人好しでもねえしな。ましてこんな時に」
「おいおい、詮索する気か？」
目の前にふっと影が落ちる。
「おや、保護者のお帰りだ」
うひゃひゃとシュカが笑う。
ふり返ると、奥でだれかと話していたヨウとレンヤが戻ってきていた。
リャンが顔の影を濃くする。
「アジトにこんなガキ連れてこられちゃ、気になるだろうが。ここは教会でも寺院でもねえんだぜ」
「俺たちの連れだから手だすなって言ったろ。それだけじゃ不服か？」
「不服だね。納得できる理由を話しな」
「ああ？」
ヨウが殺気立つ。
おもむろに、レンヤがその肩をたたいた。
「一理ある。話す」
リャンが「へっ」と笑い、ヨウが「ええー」と口をひん曲げる。
レンヤはぽんと御巫の頭に手をおき、言った。
「おん柳」
数秒の沈黙ののち、一同が声をそろえた。
「パキラ語で言え」

◆

突如、何の前触れもなくレンヤが剣をぬいた。

直後、それに反応したように三人がそれぞれ剣や大斧、長槍をかまえる。
レンヤ！？
どういうつもりかと叫ぼうとしたらヨウの肩にかつがれ、「静かに」と囁かれた。
酒場内にいた他の傭兵たちはだいたい三通りの反応をした。
驚いてこちらの様子をうかがう。同じように武器をかまえ、外に目を走らせる。まったく気にせずくつろいだまま。
そして突然、入り口の扉が何者かに蹴破られた。
怒声とともに大量の足音が飛びこんでくる。
同時に、室内の傭兵たちがバラバラに散った。
裏口、窓、入り口、二階、地下。
御巫はかつがれたまま、大窓から外へ出た。レンヤが先導し、隻腕と思えぬ素早さで外にいた兵士たちの急所を的確に斬り裂いていく。鮮血、悲鳴、怒号、臓物。様々なものが飛びかって地獄絵図と化したその場を、ヨウが短く叫んで駆けた。
アジトが国王軍にでもバレて襲撃にあったんだろうか。
レンヤが囮になって私たちを逃してくれたようだが、片腕の彼が逃げたほうがいいのでは？
遠ざかっていく彼の背を見ながら考えて、罪悪感で泣きそうになった。
もしかすると、片腕のレンヤでは御巫を抱えて剣をもてないから？
「ごめんなさい」
こんな事なら、無理を言ってでもオオゲジサマについて行けば良かった。
ぎゅっとしがみついて言うと、ヨウが笑った。
「心配すんな。兄貴は強いよ。俺、一度も勝ったことないしな！」
夕焼けで赤く染まる空が鮮血のようで、ひどく不吉に見えた。
朱色の空が群青に変わったころ。
アジトからとても離れた、貧民層の集落へ入った。

石やレンガで作られた平民層の住居とは違い、布や木だけで作られた粗末なものなのですぐわかる。貧民層には国に反感を持つ者も多く、軍の目も届きにくい。ここに、追手からかくまってくれそうな協力者がいるのかもしれない。

その中の小屋へ入ろうとして、ヨウがぴたりと足を止めた。

剣の柄に手をかけ、じりじりと後ずさる。

「ヨウ？」

「悪いなちびちゃん……俺がつけられたのかと思ってたけど、仲間に間者が紛れこんでたみたいだ」

罵声か叱責かわからない、鋭い声が小屋内から響く。

光に群がる羽虫のように、周囲の物陰から大量の兵士たちが現れた。

高台や屋根の上から弓を引き、こちらを狙っている。

ぐるりと囲むように槍の先が目の前に突きつけられる。

奥には剣の刃が飢えたようにギラギラと輝いている。

さまざまな武器をつきつけられて、ヨウは御巫を降ろして両手を上げた。

「万が一の時の避難場所までバレてるとはね」

◆

御巫はヨウと引き離され、別の場所へ連行された。

トス鉱山の隣にある、廃坑を改造した巨大地下牢。

らせん状に下へ下へと続き、アリかもぐらの巣のように枝分かれしている。

壁は硬い岩で、床は土。

暗い通路を照らすのは転々と置かれたかがり火。

兵士たちに腕をつかまれたまま「ここの牢屋なら穴を掘ればぬけ出せるかも」と一瞬思ったが、すぐに諦めた。軽く土を蹴ってみたが、岩と変わらないくらい硬い。それにこの壁の厚さからして、相

当の年月を必要とするだろう。
やがて、いつかと同じように乱暴に牢屋へ放りこまれた。
「おや、まだ死んでなかったか」
頭上でからかうような声がする。
「シュカ。無事だったんですね」
牢の中にはアジトにいた傭兵たちが２０人ほど押しこめられていた。
全員武器をとり上げられ、何人かは負傷している。
「リャンや他のみんなはどうなったんですか？」
「聞くなよ。見りゃわかるだろ」
シュカは笑うが、陰鬱な感情がかすかにうかがえて、御巫はしゅんとした。
何人かは無事に逃げたと思いたい。
「レンヤは私たちを逃がすために囮になってくれたんです。ヨウは捕まった時は一緒にいたんですが、違う所に連れて行かれて」
「あのな。あたしらは他人の心配してる場合じゃねえぞ」
「ひゃい」
両ほおを片手でわしづかみにされて、顔を上げる。
金髪からのぞく、青い目の刺青と赤い両の目がこちらを静かに見つめていた。
「あたしらに人質の価値はない。下っ端だから重要な情報も知らされていない。おそらく明日の朝、見せしめに公開処刑ってとこだろなァ。今のうちに遺書でも書いときな」
そう告げて、彼女は壁にもたれて目を閉じてしまった。
「……ちょっと、予想はしてました」
牢に入るのも二度目だし。
ぽつりとつぶやいて、手持ちぶさたになってしまった。
同じ牢に入れられている他の傭兵たちも似たような様子でいる。
悲嘆にくれて壁に遺言らしきものを彫る。殺気立って口論する。
もくもくと怪我人の看病をする。ただ眠って明日に備える。さまざ

まだ。
彼らの邪魔をするのも気が引けて、隅っこに座った。
オオゲジサマ、レンヤ、ヨウ。
無事だったらいいな。
……ついでに御巫のことも助けに来て欲しい、なんて現実逃避してみる。
まだ眠くなくて考え事をしていたら、向かいの牢でだれかが身じろぎした。
鉄格子の向こうは薄暗い闇ばかりが広がっていて、よく見えない。うすっぺらい毛布が一枚と、灰色っぽい髪の男の人が横たわっている事だけがぼんやりと知れた。
その男の人がこちらへ向かって手をのばしてきて、ぎょっとしてしまった。
鉄格子の合間から男の腕だけが出て、手まねきする。
暗闇で光る青い瞳は迷うことなくこちらをとらえている。
「あの……何かご用ですか？」
自分の牢の鉄格子まで近づいて問うと、「そうだ！」と言わんばかりに手が床をたたいた。

◆

じじっ、と牢から少し離れた場所に置かれた燭台の火がゆらぎ、油臭い匂いがした。
「なんでしょう？」
もう一度たずねるが、彼はしゃべらない。
ぱくぱくと口を動かし、自分と御巫を交互に指さした。
「もしかして、しゃべれないんですか？」
彼がうなずく。
「あ、ゲジ語もわかる方なんですね」
もう一度うなずいた。

相変わらずよく見えないが、５０歳くらいだろうか。しゃがんでいるが、けっこう背が高くて骨格がしっかりしている。ボロをまとっているはずなのに仕草がきびきびとしていて、礼儀正しいというか、身分のある人特有の威厳のようなものが漂っていた。
元は偉い人だったのかもしれない。
「それで、どういった用でしょうか？　うるさかったですか？　それとも、逆に退屈だからお話がしたいとか」
灰髪の男は一度自分の牢の奥へ戻り、ごそごそ床をほると、何かを持って再び鉄格子の前までやってきた。
鉄格子の隙間からせいいっぱい腕をのばし、それをこちらに渡そうとする。
よくわからないが、何やら鬼気迫るものを感じて御巫からも腕をのばした。
だが。
あと少しなのに、届かない。
「く……っ！」
顔と肩が食いこみ、痛むまで腕をのばすが、それでも足りない。
突然、目の前に金色が広がった。
不敵に笑う赤い瞳。
「あたしの長い腕かしてやんよ。脱獄に使えそうなブツだったら使わせろよ？」
シュカが隣にふせ、腕をのばしていた。
「ありがとうございます」
嬉しくて微笑んだが、灰髪の男はためらうように少し腕を引いた。だれでも、という訳ではなくなぜか御巫に渡したい物らしい。
「大丈夫です。彼女はいい人です」
「はあああ！？　なに言ってんのおまえ気色悪いっ」
なにを照れているのか、シュカがギラリと睨んでくるが今はそういう場合ではない。
大丈夫、と男に微笑むと、彼はおそるおそるシュカに小さな布の

カタマリを渡した。
「何かくるんであるな」
土で汚れたその布をほどくと、中から古くて高そうな首飾りが出てきた。
高貴で儚気な女性の肖像画が小さく描かれている。
まるで絵物語の人物のように浮世離れした、美しい女性だった。
「レイシの肖像画……あんた、まさかライゼンか？」
叫びそうになって、あわてて小声でシュカが告げる。
「お知り合いですか？」
「噂で知ってるだけだ。公正清廉な武骨者。民衆にも好かれ、次期公爵と噂された傑物。美女と名高かった妻レイシを奪われた失意の男としても有名で……ああ、とにかくこれはおまえが持ってた方がいい」
「なぜですか？　私はたった今、会ったばかりなんですが」
シュカが押しつけるようにして首飾りを握らせてくる。
「あいつがレンヤとヨウの育ての親だからだよ」
「あ」
どこかで聞いた名前だと思った。

その9

「ああ、さっき彼らの名前を出したから、私と彼らが知り合いだと気づいたんですね。でも、同じように牢に入っている私がこれを受けとってもあまり意味がないと思うんですが」

おそらくレンヤとヨウにこれをわたして欲しいのだろうが、方法がない。

生きてまた会えるかもわからない状況だ。

困って見返すと、ライゼンは鉄格子をつかんだままうなずいた。

頼んだぞ、と言われたようでますます動揺する。

「だから、私だって処刑されるかもしれないんですってば。彼らに会えるかわからないんです。会えない可能性の方が高いです。これは貴方が自分で持っていたほうが……」

ライゼンが首を振る。

自分を指して、すっと指先で首をかき切るような仕草をした。

「自殺する気なんですか？」

また首を振る。

どういう意味だろう？

考えていたら彼があぐらをかき、安心したように笑った。

「……善処しますけど、彼らにわたせなくても恨まないでくださいよ」

念を押すと、彼は何度もうなずいた。

何だか目が冴えて眠れなくなってしまって、それからずっとレンヤとヨウの話をしていた。

ある日レンヤがやってきて、聖山を荒らした上に御巫をさらって行ったこと。

ザイの牢で会ったヨウのこと。

彼らとの出会いから今にいたるまでを語っている間、ライゼンは時に笑い、時に心配そうに表情をくもらせた。

血の繋がりこそないものの、本当に仲のいい親子だったんだろう。
そう思うと少し、自分の家族が恋しくなった。
あっという間に朝が来て、槍で武装した兵士たちに牢の外へ追い立てられる。
こちらの方が先に処刑されるみたいだし、やっぱりあの首飾りをこっそり返そうか。
そう思ったが、静かな水色の瞳と目が合ったとたん諦めた。
そんな目をされたら、信頼を裏切るようで返せないではないか。
全力はつくします。
目で答えてきびすを返した。

◆

「え……なんですかここ」
御巫と傭兵たちが連行されたのは巨大地下牢の最深部。
殺風景なくらい何もないそこには、暗くて大きな穴だけがぽっかりとあいていた。
階層を二分割するような二つの穴。
まるで底がないような深淵の闇。
けれど、じっと見つめていたらその中で赤いものがゆらゆら動いているのに気づく。
得体が知れなくて後ずさると、いきなり背中をどんと押された。
「きゃあああああああっ！？」
落ちていく。
闇の中を転がり、ぶつかり、すべるようにどこまでもどこまでも落ちていく。
背中と足元がものすごく心細くて、つかまるものがどこにもない。
地面がなく、自分の身体が思い通りに動かせない恐怖にただ泣き叫ぶ。
そして、水の中に落ちた。

「がぼっ！？」
どぶんと全身が水に沈み、思い切り鼻と耳に水が入ってしまった。
あわてて手足をばたつかせるが、足がつかない！
そもそも泳ぎは得意じゃないのに、動きにくい服まで着ている。
体が重くて仕方ない。
がぼがぼもがく目に映る水底がとてもすみきって美しいのが皮肉だった。ちらりと見た限りでは、海と同じくらい底が深そうだ。
空気もなくなり、気が遠くなってきたころ。
だれかの腕がぐいっと腰に回された。
そのまま一気に水面へ引き上げられる。
感謝する余裕もなく、必死に息を吸った。
魚のように大口を開け、全身で呼吸している内に岸へ上げられた。
パキラ語で鋭く声をかけられ、ふり向くとそこには同じくぬれネズミと化した黒髪の女性がいた。
短髪に大きな瞳。女らしい顔立ちだが体は細く引き締まり、背も高いのでほとんど男と変わらない。
同じ牢に入れられていた傭兵の女性だ。
よく見ると周囲に他の傭兵たちもいて、それぞれ泳いだり岸へ上がったりしている。
みんなあの穴から落とされたようだ。
「アリガト！」
覚えたてのパキラ語で告げると、「いいってことよ！」とばかりに背中をたたかれた。
傭兵稼業の女性はみんな体育会系なんだろうか。
ぬれそぼった服をしぼって、はっと青ざめる。
オオゲジサマの牙がない。
服の中に隠し持っていたので手ぶらに見えたせいか、はたまた非力な子供だからか軽い身体検査しかされず、牢に入れられる時もとりあげられずにすんでいたのに。
落ちたり溺れたりしたから、きっとどこかに落としてしまったん

だろう。
首飾りがある事を確かめてから、あわてて辺りを見回す。
ない。
どこにもない。岸にも水にも服の中にも。
――けして離さないように。
なくしたらどうなるんでしょう。間違えて他の子どもを連れてどこかへ行ってしまったりするんでしょうか。それじゃ人さらいですよオオゲジサマ。そして私は置き去りの身無し子と化すわけですね何てこったい。
岸から青い水面をながめて途方にくれていたら、いきなりドラの音が耳をつんざいた。

◆

顔を上げて、ようやく周囲が目に入った。
子供の背ほどもある大きな燭台が壁際にいくつも置かれ、赤々と辺りを照らしている。
今いる場所は三つの階層にわかれているようだ。
一番上には貴族らしいきらびやかな人々がたたずみ、その中央のひときわ豪奢な席には二人の男と一人の女が腰かけている。
遠くてあまりハッキリは見えないが、この三人がパキラ国の王族だろう。
男の一人は白髪頭にやせ細った体で、すでに腰も曲がっている。たくさん飾りのついた頭上の冠が重そうだった。
おそらくこのご老人が国王。
二人目の男は三十路前後といったところだろうか。……乙女の夢を壊すようであまり考えたくないが、こちらが王子だろう。すでに王を名乗っても良さそうな貫禄だが。
がたいが良くて腕も立ちそう。腰にさした長剣がなかなか堂に入っている。青を基調とした衣やたくわえた黒ヒゲが実に似合う。な

のに顔つきはエロ親父丸だしという、どこかもったいない男だ。
残る女が王妃と思われる。だいたい五十くらいで、枯れ木のように細い。けれど華やかな装飾品に包まれた姿はどこかどっしりしているというか、威圧感のようなものを漂わせている。虫けらを一瞥するような瞳と目が合った気がして、つい視線をそらしてしまった。
彼らのそばで臣下の男が再び大きくドラを鳴らし、何かを叫ぶ。
パキラ語なのでわからないが、王様からの挨拶とかそんな感じだろうか？
長々としゃべっているそれを聞いて、そばにいた傭兵たちに緊張が走る。悪態をつく者もいた。
処刑方法とかの嫌な話だろうなと予想がついて、他の階層へ目を向けた。
どこかに逃げられそうな場所があるかもしれない。
二つ目の階層には、一般市民らしい人々が興奮した様子で寿司づめになっている。
上の階と違って椅子などはないようだが、みんな立ち見しながらも戦々恐々とした様子で下をのぞきこんだり王様の話に耳を傾けたりしていた。
そして三つ目。
御巫と傭兵たちがいる一番下の階層は、まるで湖に浮かぶ小さな小さな島だった。
脱出口らしきものは見当たらず、深い湖にぐるりと囲まれている。他の階層にはちゃんと出入口のような階段があるので壁をよじ登れば脱出できるかもしれないが、壁にはつかめそうな突起がほとんどないうえ、二階だての家ほどの高さがあるのでまず不可能だろう。
ふと、湖をはさんだ少し遠くにもう一つ島……というか陸地があるのに気がついた。
あっちにはレンヤとヨウの二人だけがいて、王様たちをにらんでいる。
無事だったんだ。

ちょっと厳しいけれど、泳いで向こう岸へわたれば合流できる。
湖に足を入れたそのとき。
「くるな！」
レンヤが叫ぶと同時に湖から赤くて大きなものが飛び出した。
最初に目についたのは刀ほどもある鋭利な牙。
それは踏みつぶされたようなぐちゃぐちゃの顔と、焦点の合わない濁った瞳をしていて、頭部にとがった赤いトサカが生えていた。
長い背ビレもこれまた赤く、ヘビ状の胴体はハガネ色に光っている。
一言で表すなら、赤い刃物のような巨大魚だ。
御巫なんか一口で丸のみにされてしまう。
が。
「オオゲジサマ？」
その醜悪な面を見て、つい期待する。
しかし巨大魚は獰猛に牙をむき、雄叫びを上げた。
何だ、ちがった。オオゲジサマなら言葉をしゃべる。
巨大魚の口の中を見ながらそんな事を考えていたら、
「バカ野郎死にたいのか！　固まってないで逃げろっ！」
一般市民の観客席からシュカが叫んだ。
「シュカ！？　なぜそこに」
いるんですかと口にする前に牙が襲ってきてあわてて岸の中央へ走る。
刃がきらめくような閃光が走ったと思ったら、陸地のはしが食われて欠けた。
「逃げろちび！　悪いけど今助けに行けない！」
わきあがるような大衆の歓声に混じって、ヨウのそんな声が聞こえた。

◆

ヨウと共に穴から湖に落とされ、岸へ上がってレンヤは眉をひそ

めた。
ここは大昔に奴隷同士を殺し合わせて見世物にしたという、闘技場では？
血なまぐさい匂いがしみついている。
「なーんか俺、これから何やらされっか予想ついちゃったかも」
水気を飛ばしながらヨウがぼやく。
「有無をいわさずギロチンよりはマシだ」
淡々と答えて、レンヤは辺りを見回した。
湖に囲まれた逃げ場のない陸地。安全な頭上の観客席で生死のやりとりを期待する観衆。そのさらに上で、こちらを見下ろし笑みを浮かべる男がいた。
すでにこの国の権力をほぼ手中にしている王子、ルイ。
あいかわらず獣のような、野心に燃える瞳をしている。
昔一度だけあの男と刃を交えた事がある。
国を追われる直前だったから、確かレンヤが１３でルイが２９歳のとき。
晴れた王宮の中庭で、彼の側近や妾たちが見守る中。
「剣に秀でると噂の王子に稽古をつけてもらいたい」とかそんな名目で勝負をいどみ、もちろん本気で斬りかかった。
しかし結果はルイの左腕に傷跡を一つ作っただけで、こてんぱんにのされてしまった。
「子供のわりに筋がいい。型どおりでなく、まるで下町の子供のような荒っぽさがのぞく剣だ。……さては、下町に友でもいるのか？」
「お褒めいただいて光栄です」
たっぷりとしたあごヒゲを揺らして、ルイが笑う。
「レンヤ。おまえ俺の臣にならないか。鍛えあげて重宝してやるぞ」
彼の暗殺を企む身としては願ってもない話だ。
側近になれば機会は格段に増える。引き受けるべきだ。
しかし、他でもないライゼンがそれを拒絶した。
「冗談じゃない！　妻だけでなく息子まで奪われてたまるものか！」

レンヤを引き寄せて叫んだその言葉が嬉しかったのを覚えている。
ルイが大剣を片手でくるりと回し、その刃でライゼンの髪をなぶった。
「ライゼン。忘れたわけではないだろう？　俺は欲しいものは必ず手に入れる。どんな手を使ってもな。手に入らぬのなら殺してしまうぞ」
数年前ライゼンが王子の命令で遠方の領地の視察へ行き、帰ってきたときにはすでに妻レイシは慰み者にされ、城の塔から身を投げていた。
レンヤが玉座の隣をにらみつける。
養父をこの牢のどこかへ幽閉した男はそこで悠然と腰かけている。
降りてこいよ。見るだけじゃおまえも退屈だろう？
右腕を失ったぶん不利なのは確かだが、それでもなお、今ならあいつの首をとれるという確信があった。
そんな挑発が効いたのか、ルイが従者に二本の剣を持ってこさせた。
が、その刃が二つとも宙を舞う。
二本の剣はまばゆくきらめき、レンヤとヨウのそばに深々と突き刺さった。

その１０

反対に思われることが多いが、レンヤとヨウではヨウの方が人見知りする。
ライゼンに拾われ、彼の目的を聞いたときも養子になると決意するまで少し時間がかかったものだ。
かび臭い路地から遠巻きにながめたことくらいしかなかった豪奢な館に連れてこられ、考えられないほど大きな部屋で見たこともないような食事を出され、ヨウは喜ぶより先に警戒心をあらわにした。
「考える時間も必要だろうから、明日の朝までまつ。それまでは兄弟水入らずでそっとしておく。ゆっくり考えてみて欲しい」
悠然とイスに腰かけたまま灰色の髪の貴族が告げる。
貴族らしくもなく鍛えぬかれた身体に上質な黒衣が映える男だ。
その言葉どおり、室内に食事や飲み物を運んできた召使たちはすでに一人残らず退室していた。
ライゼンも部屋からさろうとしたとき、
「やだっていったらどーすんの？」
すすめられたイスにも座らず、ヨウがにらみつけるように詰問した。
こちらは、みすぼらしい身なりの貧しい子供。髪も肌も服もすべて薄汚れて、ドブネズミのようだった。
少年の言葉に気分を害した素振りもなく、さらりとライゼンが答える。
「元の場所へ返すだけだ。危害を加えるつもりはないし、必要もなかろう」
「きがいってなに？　くわえるって？」
「……酷いことはしないという意味だ」
「うそつけよ。俺らドロボーなのに」
「ふむ。ではそれは狂人のたわごとを聞いてもらった迷惑料、とい

うことでチャラにしてやる」
「キョウジン？　タゴト？　なにいってんのかわかんねーよ！」
やせっぽちの6歳児が野良猫のようにいきどおる。対して、三十代後半のいい大人、もといライゼンは口をへの字に曲げた。
「おまえが馬鹿なんだ」
「はあ！？　馬鹿っていったやつが馬鹿なんだよ！　馬鹿！」
「ここまで知能がないとは思わなかった。剣の腕より先に教養をたたきこむ必要があるな。教師を手配しよう。なれるまでは二人一緒に勉強させて、なれたら一人ずつ武芸と勉強を交代で教えてやる」
「まだやるっていってねーだろ！　きけよおっさん！」
「レンヤ。それでどうだ？」
ライゼンが問うと、スープに肉、サラダ、パンなどを黙々と胃袋に収めていたレンヤが手を止めた。
「俺はそれでいい」
「ほら、兄貴は承諾したぞヨウ」
「なにいってんだよ！　つーか一人でバクバク食ってんじゃねえええええへんなもん入ってたらどーすんだよ！？」
レンヤは意に介さずジュースを飲みほす。
外見は鏡のようにそっくりな二人だが、今は心なしかレンヤのほうが満ちたりた顔をしている。
「殺すつもりならつれてこないだろ」
「どっかに売りとばすつもりかもしれないじゃん！」
浮浪児仲間の少女は知らない大人に与えられたぶどう酒を飲んで気を失い、どこかへ連れさられた。売られたか、奴隷にされたのだと8歳上の少年が教えてくれた。そうなった者がどういう扱いを受けるかも。
「本人が目の前にいることを忘れてやしないか」
ぽつりとライゼンがつぶやくが今はそれどころではない。
「ヨウ。こいつは金もちだ。こどもを売りとばして小銭をかせぐ必要はないし、いくらでもきれいな奴隷を買えるのにわざわざ汚いガ

キをつかまえる必要もない。ついでに、獣のエサにするならこんなキラキラした部屋に入れたりしないぞ」
「で、でもさあ」
口ごもる弟にレンヤは肉と野菜のサンドイッチを手わたした。
「鎖でつながれてるわけじゃないし、みはりもいない。いつでも逃げられるようにしてるのは、たぶんこいつなりの……なんだ、アレだ」
「誠意というのだ」
わかってるじゃないかとライゼンが笑う。
レンヤはとことこテーブルまで歩いてフォークとナイフを手にとると、軽くゆらしてみせた。
「もしライゼンがへんなことしたら、こいつで刺して逃げればいいんだ」
「命知らずな小僧どもめ」
ライゼンは軽く顔をしかめ、
「だが、それくらいでなければ暗殺などできまい」
脱力したように笑った。
ヨウはしばらくサンドイッチを疑わしげに見つめていたが、ようやく一口かじった。
……当時はいけ好かない貴族にレンヤがあっさりなついたように思えて気に食わなかったが、今思い返してみると別にそうでもなかったようだ。

◆

どうしてこんな昔のことを思い出すんだろう。縁起でもない。走馬灯のようではないか。
逃げ場のない浮島の上で、ヨウはひそかに歯がみした。
はるか頭上では従者の長い前口上が終わり、王子ルイが嘲笑もあらわに口を開いた。

「どっちがどっちだかわからんが、聞け双子。おまえたちには互いに殺し合ってもらう！　右腕がない方が勝ったらおまえたちの養父ライゼンを助けてやる。ただし、向かいの島にいる反乱軍どもはすべて神の使いの贄にする」

”神の使い”というのは浮島の周りを囲う湖で自在に泳ぎまわっている怪魚のことだ。

パキラの神が騎乗し使役するといわれている生き物で、国の慶事に生まれ弔辞に死ぬ。性質は獰猛で肉食。鋭利な牙と背ビレはどんな名剣より斬れるという。

「五体満足な方が勝ったときは反乱軍を減刑して終身刑にし、ライゼンはこの場で打ち首だ！　二人とも戦おうとしなかった場合は二つの浮島を両方水没させる。神の使いに食われるのだ。光栄だろう？」

どうやら今立っているこの浮島は高低を操作できるらしい。忌々しいことだ。

ルイを睨みつけていたらふと、違う方向から視線を感じてヨウはそちらに目だけを向けた。

金色の髪に赤い瞳。額に青い目の模様の刺青。シュカが頭上の観客席からこちらを見下ろしていた。その顔には喜怒哀楽のどれも浮かんでいない。彼女は冷たく双子を数秒見つめ、やがて、少し前まで自分の仲間だった反乱軍たちに視線を移した。

裏切り者め。どの面下げてそんな所に。

あるいは元からスパイだったのか。反乱軍のアジトを密告したのは彼女だろうと悟ってヨウは目をつり上げた。実はちょっと好みだったのに。

「よそ見している場合か？」

ルイが自らのヒゲをなぞりながら笑う。

「浮島は二つとも徐々に沈んでいる。急がなければだれも助からんぞ」

「ライゼンの顔を見せろ！　無事なんだろうな！？」

ルイがあごをしゃくると、二人の兵士が男を連れてきた。
乱れて荒れた灰色の髪。布で目隠しをされ、両手を後ろで縛られたうえにさるぐつわをかまされている。長身をつつむ黒衣の胸元には三本の剣が描かれた家紋が縫いつけられていた。
「ライゼン！」
ヨウが叫ぶ。
ライゼンが軽く身をよじる。生きている。レンヤとヨウを逃したときに殺されてしまったと思っていたが。
じわりと目頭が熱くなった瞬間、ルイがライゼンを蹴り倒した。
灰色の髪が地面に沈み、視界から消える。
「さあ、殺しあえ」
ルイが愉悦に瞳をゆがめた。
ヨウは全身の毛がざわりと逆立ち、血が逆流するような感覚を覚えた。
目の前の地面につき立っていた剣をレンヤが乱暴に引きぬく。
考えるより先に身体が動いた。
ヨウはもう一つの剣を引きぬきながら後方へ飛んだ。するどい剣先が目の前を通り過ぎ、左のほおを裂く。小さな血しぶきが流れていった。
怒号のような地割れのような歓声で周囲がどっとわきたつ。
「レンヤ！？」
あわてて剣を構え、体勢を立て直しながら問うと、暗い怒りに燃える瞳で片割れが口を開く。
「ここへ来た目的を忘れるな。ライゼンには返し切れないほどの恩がある」
「わかってる！　でもちびちゃんや革命軍のやつらを見殺しにする気かよ！？　つーか血をわけた弟を殺す気かァ！？」
レンヤはじりじりと距離をつめてくる。
まばたきする余裕もなくヨウも間合いを測る。
「俺はあのクソバカ王子のいいなりなんてごめんだからな。なんか、

他に方法があるはずだ」
「あればとっくにそうしてる。ライゼンに救われた命だ。ライゼンに返せ」
ヨウの目がぎりりと釣り上がった。
「てめえ……条件逆でもいえたか？　その言葉？　今ここでおまえが魚のエサになればライゼン助けるってあいつがいったら死ねんのか？　ああ？」
「ああ、その時は死んでやる」
レンヤが平然と告げると同時に電光石火の連撃がヨウを襲った。
手足などではなく容赦なく急所を狙ってくるそれらを危うい所でかわしつつ剣で受け流し、時に反撃しながら唇を噛みしめる。
やべえ、かんっぜんに頭きた。
「わーかったよ。やってやるよ。そんなに死にたきゃ死んじまいな。ライゼンには悪いけど俺は勝つ。……だいたい、双子のくせに兄貴面してんのが気に食わなかったんだよ昔からさあ。同じ顔なのにスカした面ばっかしやがってこの能面野郎ッ！」
ヨウが中段の構えから斬りかかる。
レンヤは一瞬、わずかに笑んだ。
「おまえなんか俺がいなきゃ十回は死んでる」

◆

「きゃーっ！？　うわーっ！　みぎゃーっ！？」
御巫（みかなぎ）は悲鳴を上げながら右へ左へ逃げ回っていた。
浮島はどんどん沈んで水面へ近づいていくし、とびはねた怪魚がもう何人も傭兵を食い殺している。水面へ近づかなくても、向こうから襲いかかってくるのだ。今も背後で傭兵が一人上半身を食いちぎられ、もう一人は丸のみにされて大きな口の中へ消えていった。
「はあ、はあ……なんだかよくわかりませんが、公開処刑ってやつですかこれは」

レンヤとヨウだけ隔離されている所をみると、双子の彼らにはまた別の罠がしかけられているのだろう。
そして、あまり考えたくはないが。
シュカだけここへ落とされていないのは、彼女は敵だったということなのだろうか。
ちらりと頭上をあおぐと、静かに見下ろす赤い瞳と視線が合った。
もしそうなら人間不信になってしまいそうだ。つい「クソババアー！」と叫びたくなったが、ぐっと口を閉じる。さっきの「逃げろ」という言葉に免じて、もう少しだけ彼女を信じてみようと思った。
怪魚の襲来に備えていたら、不意に背後にいた傭兵の一人にひょいとつまみ上げられた。
「……なにをするんです？」
つるつる頭のいかついお兄さんだ。
湖から引き上げてくれた女性がそれに気づいて短く問いかける。
こんな時になにをモメているのか、両者とも語気が荒い。
「とりあえず降ろしてもらえませんか。このままじゃ逃げられま」
目の前に血しぶきが舞った。
どうして？
ハゲ頭の傭兵が女の傭兵の肩から胸もとの辺りを切り裂いていた。とっさに後ずさったらしい女が傷口を押さえて苦痛にあえぐ。どくどくと赤い液体がにじみ、こぼれて地面を染めていく。
仲間同士でしょう？　王様になにかいわれたんですか？　生き残った一人だけを助けるとか？　そんな、何のためらいもなく。
信じられない思いで男をにらみつけたが、目が合うより先に御巫は湖へ放り投げられた。
「バカー！　恨んでやりますからー！」
宙を舞っている間、視界の片隅で苦しそうな表情を浮かべたシュカが見えた気がした。
また水中へ落下するものと思っていたら、さっと視界が闇に包まれた。刀のように大きく鋭い無数の牙が頭上を過ぎる。湿った血な

まぐさい風が全身をなぶり、べたべたした地面へ激突した。
「ひゃあっ」
がり、と硬いものが手の甲を裂く。
「いたい」
じんわりと血がにじんだ。
なにが引っかかったのだろうと見てぎょっとする。ぐちゃぐちゃの死体からはみでた骨に当たってしまったらしかった。辺りを見回すと、似たような死体があちこちに散乱している。それらは氷のようにじわじわと下部が溶けている。うす暗くてよく見えないが、でこぼこした桃色の壁はかすかに動いているようだ。
「お腹の中……？」
まだ生きているが、あの怪魚に飲まれてしまったようだ。
だが、このままだと消化されるのは時間の問題だろう。どこか胃液が届かない所を探すか、なんとか脱出するかしなくては。
つぶやくと、奥から見覚えのある傭兵たちがやってきた。
「ミカナギ！」
よくわからないが「おまえも食われたのか」らしきことを話しかけられている。
何人も食べられてしまったが、助かったのは丸のみにされたこの三人と御巫だけのようだ。
「でも、どうやって逃げればいいんでしょう」
ここから出られたとしても、あの浮島へもどれば処刑されてしまうし。
なんとなく意味は伝わったのか、三人は肩をすくめたりため息をついたりした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3863s/

オオゲジサマ―呪と贄編―

2011年10月28日08時04分発行